

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第17回 エルサルバドル

マルタ・リディア・セラヤンディア・シスネロス 駐日エルサルバドル大使 エルサルバドルは決して遠い国ではない —再び日本からの投資を—



エルサルバドル共和国のマルタ・セラヤンディア駐日大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本のサンフランシスコ講和条約締結時の秘話を披露するとともに、日本から期待される協力および投資の分野、問題点等について見解を表明した。

セラヤンディア大使はエルサルバドル国立大学で生物学、中米カトリック大学で工学を学び、また独学で日本語、英語、ドイツ語を学び、通訳・翻訳家として活躍。2010年に駐日公使参事官兼代理大使に、11年に大使に就任した。日本の小学校で国際理解教育に関わるなど知日派として知られる。大使は女性のエンパワーメントに積極的で、本誌2014/15年冬号に男女共同参画の画期的な取組み—シウダ・ムヘール（「女性の街」）について序論を執筆されている。

インタビューの一問一答は次のとおり。

—大使は日本に30年以上在住され、駐日大使に就任されて約4年になられますが、日本についてどのような印象をお持ちですか？これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 日本に着くまでは日本は豊かな先進国で人々はみな幸福に過ごしているものと思っていましたが、電車に乗るとみな疲れた顔をされているのが印象的でした。夜遅くまで仕事をし、通勤に片道1時間、場合によってはそれ以上かかるからでしょう。また日本の家庭では一般に夫の収入に依存し、妻は家事と子供の養育に専念する人が多いのでしょうか。私はエルサルバドル東部のサンミゲル出身で、両親は共稼ぎでしたが、両親の職場はどちらも自宅から近く、昼食も夕食も家族全員一緒に幸せでした。

他方、日本人の誠実さ、勤勉さ、責任感にはいつも感心させられます。組織のなかでどこか欠けたところがあると、上司の指示を待つことなく誰かが率先して事に当たります。2011年の東北大地震のときも商店の略奪などがあるどころか、住民が一致団結して助け合う姿を目にして感動しました。私の親戚はサンフランシスコで大地震に遭いましたが、米国でもやはり略奪などがあったそうです。人の幸福にと

ってどこでバランスをとるかは中々難しい問題ですね。

—「中米の日本」と呼ばれるエルサルバドルは日本にとっても大事な国です。日本の製造業のラテンアメリカにおける戦後最初の投資は60年前にエルサルバドルで行われました。また、日本の自動車のラテンアメリカにおける最初の代理店が設けられたのも、ラテンアメリカ初の青年海外協力隊が派遣されたのもこの国でした。現在のエルサルバドルと日本の関係についてはどう見ておられますか。

大使 日本との友好関係の一つのきっかけは、ご指摘のとおり、戦後の早い時期から日本企業がエルサルバドルに進出したことでした。その上にもう一つ付け加えさせて頂くと、その前に連合国と日本国とのサンフランシスコ平和条約締結（1951年）に際し、エルサルバドルがとった態度です。エルサルバドルは憲法の規定に従い日本の財産を没収することにより戦争賠償をさせるという方法を認めることはできない、またヤルタでの大国間協議によりソビエト連邦が占領するクリル諸島（千島）及びサハリン島（樺太）の一部を日本に放棄させることは没収される側

の国民と協議せずに実行された他国による事実上の占有であり容認できないと強く主張したことです。それは議事録に残されており、駐エルサルバドル米大使の抗議にも届きませんでした。

エルサルバドルは領土が狭く、資源も乏しいですが、国民が勤勉であるため我々自身も「中米の日本」と呼んできました。しかし1980年代に内戦が激化、国内の疲弊と治安の悪化のため多くの進出企業が撤退しました。幸い1992年に和平合意が調印され、和平後の復興再建は進んでいます。内戦の傷跡は大きく、日本との二国間関係についても完全に回復したとは言えません。進出日本企業はユサやインシカのように現地に長く頑張っている企業もありますが全部で4社と少なく低調です。今後やるべきことは山ほどあります。是非日本の協力を引き続きお願いしたいと考えています。

―エルサルバドルは為替が安定し、インフレがないという利点はありますが、他方で治安の問題等投資環境は必ずしもよくないようです。エルサルバドルと日本の貿易・投資関係の展望はいかがですか。日本企業はグローバル化の中で貿易よりも投資に重点を置いているようですか。

大使 日本企業は地理的にも考え方の点でも近いためかアジア中心です。

エルサルバドルは非常に遠隔の地と思われがちですが、実はそれほど遠くはありません。ヒューストンからサンサルバドルまで直行便で3時間足らず、マイアミやニューヨークからも直行便が飛んでいます。東北大震災のときも、その後のタイの大洪水のときもそうでしたが、日本の自動車産業は部品のサプライチェーンが寸断され多大のダメージを被りました。エルサルバドルは人口の平均年齢が非常に若く、外資が入って来ないと熟練工が米国等に出てしまうという問題があります。エルサルバドルには勤勉な労働力が豊富にありますので、是非エルサルバドルに目を向けてほしいと思います。

―中米統合機構（SICA）諸国は経済統合が進んでおり、米国及びEUとの間で自由貿易協定が締結されているほか、中米5カ国の域内関税の99.9%は撤廃されていると聞きますが、日本企業がエルサルバドルに進出すれば成功するだろうと思われる業種はありますか。

大使 地熱エネルギー等再生可能エネルギー分野および農産品加工分野が有望ではないでしょうか。エルサルバドルは農産品の自給率が低いいため、日本の技術により垂直農法や有機農業を導入して自給率の向上を目指す必要があります。開発が遅れている東部地域にJICAによる重点的な援助が実施されていますが、農業・農産品加工分野で専門家が常駐し、それが将来的に日本の投資に繋がればと思います。

―今年日本と中米5カ国との外交関係樹立80周年にあたるため、「日・中米交流年」と定められ、5月末には「第2回日・中米ビジネスフォーラム」（於グアテマラ）が開催されました。エルサルバドル側では同フォーラムはどのように評価されていますか。

大使 結論的には全体として非常に良かったと評価しています。日本からの参加企業は52社、参加者は110名、中米側からは153社、298人と多数の参加者があったと聞いています。ビジネスフォーラム自体は成功裏に終わりましたが、問題はむしろこれからです。会議の結果を今後いかにフォローアップし、成果を現実のものにしていくか、本当の評価には少し時間がかかるかと思います。

―日本はサンサルバドル国際空港、ラ・ウニオン港、サンミゲル市バイパス建設と言ったインフラ・プロジェクトに円借款を供与しました。また我が国は開発が遅れている東部地域の経済活性化・雇用拡大や自然災害への脆弱性が課題となっていることから防災分野への援助を実施していますが、日本の協力をどう評価されていますか。

大使 日本はエルサルバドルにとっての主要援助国であり、エルサルバドル政府及び国民はこれまでの日本の援助に深く感謝しています。私の出身地のサンミゲルにあった1軒の小さなパン屋さんがこつこつと働き、今は全国規模の立派なパン製造会社に発展しています。エルサルバドル人は一般に進取の気質に富んでおり、また働き者です。日本の大分県で始まった一村一品運動のようなものをエルサルバドルでも始められればと思います。今後はエルサルバドルの経済・産業構造の高度化や多様化に向けた中小零細企業の経営能力強化支援や関連政策づくり支援、そして中小零細企業におけるマーケティング活動への支援などが有益だと思います。そしてそのためには専門家の短期派遣ではなく、できれば常駐し

ていただければと願っています。

— パナマ運河の拡張計画に加え、ニカラグアが中国の協力による新運河の建設を計画しているという話があります。他方、エルサルバドルのラ・ウニオン港（太平洋）とホンジュラスのコルテス港（大西洋）を高速道路で結ぶドライカナル構想もあるやに聞きます。このプロジェクトの現状と今後の見通しはいかがでしょう。

大使 コルテス港とラ・ウニオン港を結ぶいわゆるドライカナル構想はパナマ運河の肩代わりをすることはできないにしても、エルサルバドル、ホンジュラスはもちろんグアテマラやニカラグアをも裨益し、中米中央部の発展を促すとともに、その物流を担う重要な役割を果たすことが期待されています。ただ実はラ・ウニオン港は完成しましたが未だ商業的にはほとんど利用されていません。先般エルサルバドル政府が行った運営会社の入札が応札者不在で不調に終わりました。これには理由が二つあり、一つは民間企業にとって入札条件が厳しいこと、もう一つは同港が定期的に浚渫を必要とすることです。いずれにしてもエルサルバドル政府は日本側とも協議しつつこの問題を早急に解決したいと考えています。

— エルサルバドルは台湾と外交関係を持ちつつ、中国との通商関係促進にも前向きと聞いていますが、現状と今後の見通しはいかがでしょう。

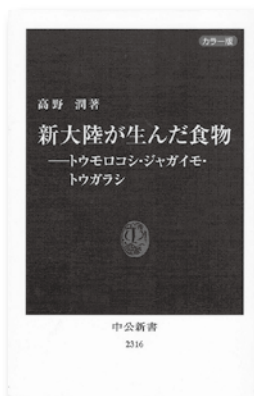
大使 ご指摘のとおりエルサルバドルは台湾と外交関係を持ちつつ中国との通商関係を進めています。鄧小平の改革開放政策以降、中国も台湾との関係継続に以前ほど神経質ではなくなったようです。エルサルバドルとしては今後もこの関係を継続することになるでしょう。

— 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありますか。

大使 先ずはこのような機会を与えていただいたラテンアメリカ協会に感謝いたします。そして『時報』の読者には二つ申し上げたいと思います。一つは繰り返しになりますが、エルサルバドルは決して遠い国ではありませんので、とにかく一度見に来て下さい。きっと気に入って頂けると思います。もう一つはエルサルバドルがとてもポテンシャルのある国だということです。日本の企業には是非エルサルバドルに投資していただきたいと願っています。

（インタビューー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤 昌輝）

ラテンアメリカ参考図書案内



『新大陸が生んだ食物』

— トウモロコシ・ジャガイモ・トウガラシ —

高野 潤 中央公論新社（中公新書）

2015年4月 182頁 1,000円+税 ISBN978-4-12-102316-2

コロンブスの新大陸到達以来、現在世界中に広まり栽培され食用に供されているラテンアメリカ原産の食物は極めて多い。それらの中で、日本人の食生活に根付いているトウモロコシ、ジャガイモ、トウガラシを中心に、キヌア、サツマイモやカボチャ、アボガド、パパイヤ、パイナップル、カカオ、カシューナッツ等を取り上げ、40年余南米に通っている写真家が原産地を訪ねて栽培する人々の姿、自然環境や食利用の様子、人々の生活との関係などを、美しいカラー写真で見せてくれる。

これら食物や果実の色、形、種類が実に多種多様であること、その栽培、収穫、保存、加工、調理に、それぞれの地方、家庭なりに工夫がなされていることなどもよく判る楽しい写真の豊富な紀行・解説になっている。

〔桜井 敏浩〕